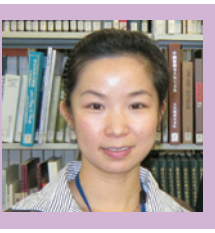
中国における日本映画の伝播と受容



康　楽
（中山大学）

日本映画の対中輸出を、文化大革命期を軸に“文革前”、“文革中”、“文革後”と大まかに３つの時期に区分して、各時期の輸出状況と中国における受容について映画関連文献（映画年鑑、キネマ旬報など）をもとに考察した。

東京国立近代美術館フィルムセンター（左：7F 展示室　右：4F 図書室）

一　“文革前”（50 年代）の左翼的映画

中国への日本映画輸出は北星映画配給の「どっこい生きてる」（今井正監督、1951 年）「箱根風雲録」（山本薩夫監督、1952 年）「女ひとり大地を行く」（亀井文夫監督、1953 年）の３作品が初めてである。その後、「混血児」「太陽のない街」「ひろしま」「原爆の子」「蟹工船」「縮図」「山びこ学校」「ひめゆりの塔」などの日本映画が中国へ輸出していった。

「箱根風雲録」などが公開され好評を博したので、日本映画への関心を高めるため、中国対外文化協会、電影工作社連議会の共催で 1956 年６月 24 日から 30 日まで戦後初めて北京において日本映画週間が開かれた。

上映作品は「二十四の瞳」（木下恵介監督、1954 年）「太陽のない街」（山本薩夫監督、1954 年）「最後の女たち」（楠田清監督、1954 年）「愛すればこそ」（今井正、山本薩夫、吉村公三郎共同監督、1955 年）「ここに泉あり」（今井正監督、1955 年）の５本で、いずれも反戦や資本主義批判をテーマとする左翼的傾向の映画だった。監督陣の木下恵介、今井正、山本薩夫、新藤兼人の演出や、俳優陣の乙羽信子、山田五十鈴、高峰秀子、岸旗江の演技が、一般観客のみならず、中国の映画人からも極めて高い評価を得た。

二　“文革中”（60 ～ 70 年代）の戦争映画

中国の文化大革命は「封建的文化、資本主義文化を批判し、新しく社会主義文化を創生しよう」という名目で行われた改革運動であり、1966 年から 1976 年まで続いた。文革期において、資本主義国である日本の映画を受容できる唯一のルートは、「内部上映」と称される政府機関内の映画試写会のみだった。

1971 年２月から４月にかけて「連合艦隊司令長官山本五十六」（丸山誠治監督、1968 年）「日本海大海戦」（丸山誠治監督、1969 年）「あゝ海軍」（村山三男監督、1969 年）が全国各地で盛んに内部上映され、多くの中国人が批判目的で鑑賞することとなった。これらの作品評は中国の映画人や「人民日報」をはじめとする各マスメディアによって大きく取り上げられた。

三　“文革後”（80 年代）の日本映画ブーム

80 年代の日本映画の中国への輸出は、主として「日本映画祭」を媒介としていた。1978 年 10 月 26 日から 11 月１日まで、改革開放後はじめての「日本映画祭」として北京、上海、天津、広州、武漢、成都、瀋陽、西安の８つの大都市で行われ、「君よ憤怒の河を渉れ」（佐藤純弥監督、1976 年）「サンダカン八番娼館・望郷」（熊井啓監督、1974 年）「キタキツネ物語」（蔵原惟繕監督、1978 年）の３本の日本映画が上映されて話題を集めた。引き続きこれらの作品は中国全土で繰り返し上映されてたいへんな数の観客に観られた。とりわけ「君よ憤怒の河を渉れ」と「サンダカン八番娼館・望郷」の２つの日本映画は、改革開放時代の到来を表す代表的な作品として熱狂的に受容され、中国における外国映画史上、空前の大ヒット作となった。

1978 年に中国で初公開された「君よ憤怒の河を渉れ」「サンダカン八番娼館・望郷」「キタキツネ物語」に続き、1979 年には中村登監督の「愛と死」や佐藤純弥監督の「人間の証明」、翌 1980 年には野村芳太郎監督の「砂の器」が評判になった。

1991 年までに「日本映画祭」は定例行事として中国各地でほぼ毎年開催されたため、日本映画は持続的なブームを形成した。

紙面の都合上、ここでは概略を述べるにとどめるが、詳細は今後の研究で明らかにしたい。